# 主体的に学び、思考力、判断力、表現力等を身に付ける指導方法の工夫

## ―ギガタブを用いた「話すこと」「書くこと」の言語活動を通して―

千葉市立加曽利中学校　教諭　宇都　貴裕

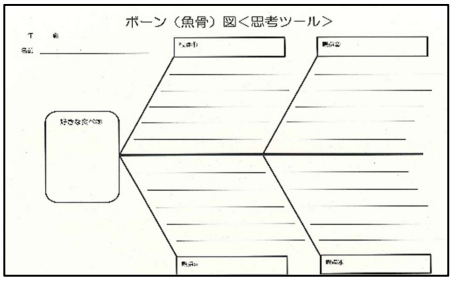
**≪研究の概要≫**

本研究は、１人１台端末タブレットＰＣ（以下「ギガタブ」という）を活用することで、生徒が主体的に学び、言葉による見方・考え方を働かせ、自らの表現方法を向上させられるということを明らかにするものである。ギガタブを活用することで、一連の学習過程を一つ一つ切り離さずに自己調整しながら取り組むことができると考え、生徒自身が言葉を用い、目的や意図を理解し、表現し、人間関係等を形成できることを自覚して、よりよい表現を認識するなど、言葉に対する意識を広げることができるかを検証した。その結果、自分の思いを適切に表現する資質・能力を身に付けさせることができた。

### １　問題の所在

「もっと生徒に力を付けたい」教員になってから日々考えていることである。自身の授業を振り返ると、困っていた生徒が目に浮かぶ。生徒にうまく考えをもたせられなかった。生徒から考えをうまく引き出せなかった。生徒がよい考えをもっていても表現させられなかった。

このような思いから、思考ツールを用いた実践を行ってきた（[図１]）。平成 29 年には国語科主任研修会の授業者として「わかりやすく説明しよう～加曽利ログを作ろう　思考ツールを用いて～」の授業を行った。




[図１]思考ツール

実践の成果は、生徒の表現したいものを可視化することで、言葉に着目しよりよい表現を探る足掛かりになることであった。一方、課題は授業が一時間目は構成の授業、二時間目は記述の授業というようにぶつ切りで行われており、生徒の思考の連続性が見られなかった。過去の研究も踏まえ、課題設定→情報収集→構成→記述→推敲という書くことの一連の学習過程を、一つ一つ切り離さなければ、より生徒の思考力・判断力・表現力等を身に付けさせることができるのではないかと考えた。ここで述べる「思考力・判断力・表現力等」とは、藤森（2018）が示した、「実際的な活動を経験する場で、思考・判断・表現の行為を自ら行おうとする際に働く自信と技術である」ことである。つまり、「思考力・判断力・表現力等」は、自ら課題に向かい、対応することへの意欲と言葉を用い、何かを理解し、表現し、人間関係等を形成できることととらえている。

「中学校学習指導要領解説国語編」では、言葉による見方・考え方を働かせるとは、「自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」と示している。

そして、千葉市においては、「千葉市学校教育の課題 21 世紀を拓く」で国語科より、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成するための授業の工夫改善を図ることを目標としている。また、タブレットＰＣをはじめとしたＩＣＴを用いた学習方法の工夫改善を図ることが令和３年度の課題とされている。

次に、本校の生徒の実態から考える。まず、令和３年度全国学力・学習状況調査の結果【評価の観点】を踏まえ、本校の生徒の実態を千葉県（公

立）と比べて考えると、国語への関心・意欲・態度は 13.1 ポイント、話す・聞く能力は 7.6 ポイント、書く能力は 8.9 ポイント下回っていることが分かった（[表１]）。特に、国語への関心・意欲・態度に大きな差が見られた。

［表１］令和３年度全国学力・学習状況調査の結果

（本校・千葉県・全国）【評価の観点】

| | 本校 | 千葉県（公立） | 全国（公立） |
|---|---|---|---|
| 国語への関心・意欲・態度 | 42.9 | 56.0 | 56.0 |
| 話す・聞く能力 | 72.3 | 79.9 | 79.8 |
| 書く能力 | 47.3 | 56.2 | 57.1 |
| 読む能力 | 42.5 | 49.5 | 48.5 |
| 言語についての知識・理解・技能 | 73.8 | 74.7 | 75.1 |

さらに、令和３年度全国学力・学習状況調査の結果【生徒質問紙】から、「国語の授業の内容はよく分かりますか」の質問では、肯定的な意見の生徒が 64.6％に対して否定的な意見の生徒が 35.4％いることが分かった。さらに、「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか」の質問では、肯定的な意見の生徒が 77.4％に対して否定的な意見の生徒が 21.6％いることが分かった（[表２]）。

［表２］令和３年度全国学力・学習状況調査の結果

（本校・千葉県・全国）【生徒質問紙】

| １　当てはまる　２　どちらかといえば、当てはまる<br>３　どちらかといえば、当てはまらない　４　当てはまらない | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 国語の授業の内容はよく分かりますか | | | |
| 選択肢 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 本校 | 19.4 | 45.2 | 22.6 | 12.9 |
| 千葉県（公立） | 28.0 | 48.5 | 18.3 | 5.0 |
| 全国（公立） | 31.5 | 48.6 | 15.8 | 4.0 |
| | 国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思いますか | | | |
| 選択肢 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 本校 | 37.1 | 40.3 | 16.9 | 4.8 |
| 千葉県（公立） | 49.3 | 37.0 | 10.1 | 3.3 |
| 全国（公立） | 53.7 | 35.0 | 8.4 | 2.7 |

最後に、ギガタブを用いた言語活動を行う理由として、石丸（2021）は、「＜教師⇔子供＞の直接的な関係で成り立っていたこれまでの教室に、直接的な関係に加えて＜教師⇔（Chromebook）⇔子供＞、＜子供⇔（Chromebook）⇔子供＞という間接的な関係をつくり出すことで、『見えないものを見えるようにする』『表現できないものをできるようにする』『わかりにくいことをわかりやすくする』ことができるようになる」と示している。つまり、ギガタブを活用することで、新しい関係を生徒と築くことができ、生徒の思考をギガタブ上に可視化させ、表現力等を向上させることができる可能性があると考えた。

以上のような考えも踏まえ、本校１年生生徒の実態と生徒が行える活動が制限される新型コロナウィルス感染予防という条件を鑑み、生徒がギガタブを活用した「どっちの料理ショー　～自分の好きな食べ物を紹介しよう～」（「話すこと」の言語活動）「私のおすすめの一冊を紹介しよう」（「書くこと」の言語活動）を実践した。ギガタブを活用することで、生徒が主体的に学び、言葉による見方・考え方を働かせ、自らの表現方法を向上させていくと考える。

## ２　研究の目的と方法

### (1) 研究の目的

本研究は、ギガタブを活用しない場合と比べてギガタブを活用することで、生徒が主体的に学び、言葉による見方・考え方を働かせ、自らの表現方法を向上させる有効性があることを明らかにするものである。

### (2) 研究の方法

本校１年生の生徒 150 名のギガタブを活用した話すこと・聞くこと、書くことの実践を通して、「主体性」、「表現力の向上」の二つの視点で研究・調査していく。

## ３　研究の内容

### (1) 生徒の実態調査

［表３］本校の生徒の意欲面の実態

| 国語の書くことに対して、前向きに取り組むことができますか？ | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | ４ | ３ | ２ | １ |
| 学習前 | 36.4% | 33.3% | 30.3% | 0% |
| ４　そう思う　３　どちらかと言えばそう思う<br>２　どちらかと言えばそう思わない　１　そう思わない | | | | |

［表３］は、ギガタブを活用した実践を行う前の書くことに関する生徒の意欲面の実態である。肯定的な意見が 69.7％と半数を超えた。肯定的な回

答の主な理由は、「自分の考えが手書きの文字として表れるのがうれしいから」「書くうちにいつもとは違った自分になれるから」などであった。否定的な意見は30.3%見られた。否定的な回答の主な理由は、「何を書けばよいのかがわからない」「書くこと自体に苦手意識がある」などであった。

したがって、ギガタブを活用することで、相手意識や目的を理解し、学習過程を一度にでき、思考の整理がしやすくなり、自分の思いや考えを適切に表現する資質・能力を身に付けさせられると考えた。また、生徒自身が「この思いをこんな言葉で表現すればしっくりくる」「私はこの言葉に着目して文章から必要な条件を見付ける」などの教師から意識させず、自発的に意識する学ぶ意欲を引き出すことができると考えた。

**(2) 授業実践**

**①授業１（「話すこと」の言語活動）**

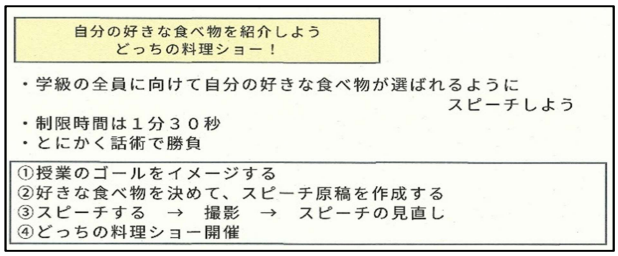
単元名「どっちの料理ショー　～自分の好きな食べ物を紹介しよう～」

**ア ねらい**

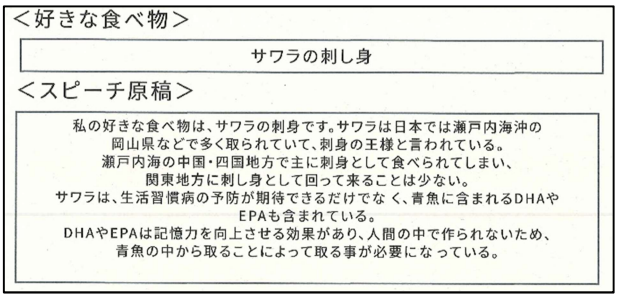
自分の好きな食べ物をスピーチによって紹介する言語活動を行う。スピーチ原稿を作成する場面、スピーチを録画し練習する場面、スピーチで発表する場面で学習ツールとしてギガタブを用いることで、原稿の作成、話す練習の過程において生徒の思考が整理されることをねらいとしている。

**イ 授業内容**

最初に、動画で日本テレビの「どっちの料理ショー」を示し、授業のゴールのイメージをもたせた（[図２]）。次に、自分の好きな食べ物を決めさせ、スピーチ原稿をギガタブで書くように促した（[図３]）。

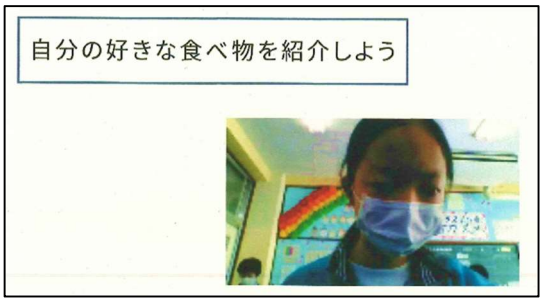



[図２]ギガタブで生徒に示した授業イメージ




[図３]生徒が作成したスピーチ原稿

生徒がギガタブの動画の録画機能を活用して、目線、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すことができているかに注目するように促し、自分の好きな食べ物を紹介している様子を確かめられるようにした。特に、最初に録画した映像は、自らの話し方の課題を見付けるための自己分析用に使用した（[図４]）。




[図４]生徒が実際に話している様子

さらに、個人の話し方に関する課題を解決するために、自分の話す姿を記録し、その姿を見て練習できるようギガタブを用いた。最終的に練習後の自分の姿を録画し、練習前と後の自分の話し方を比較することを学習の振り返りとした。生徒が、自分と他者を比較するだけではなく、練習前と後の自分を比較することによるメタ認知をし、話す力の伸びを実感できるようにすることを特に重視した。

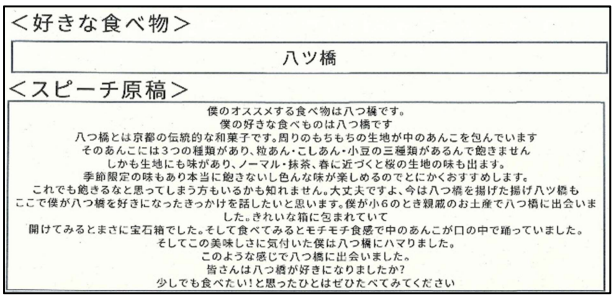
**ウ 生徒の姿**

ギガタブを活用し、自分の「話す」様子を複数回見返しメタ認知することや、他の生徒の発表の様子を見比べることで、自分の言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることができたと考える。

ギガタブを活用し練習前と練習後の自分の話し方を比較することで、生徒自身も１回目との違いを確認したいと考え、２回目を撮りたがる生徒

もおり、生徒自身が本来もっている成長したいという思いなど、自ら課題に向かい、対応することへの意欲を見取ることができた。また、ギガタブを活用することで自分自身の成長が自覚でき、「練習すれば上手になる」という主体的に学ぶ意欲を観察することができた。

自分の話し方を録画し、何に着目すればよりよい発表になるか生徒に考えさせたところ、「声の高低」「表情」「口ぐせ」「話す時間」「内容の再構成」などの観点に着目すればよいという意見が出た。これはギガタブを活用したことで、客観的に自分を見直し、修正しようとメタ認知し、自分の発表を理解し、表現しようとして、よりよい表現に変える活動ができたと考えられる（[図５][図６]）。

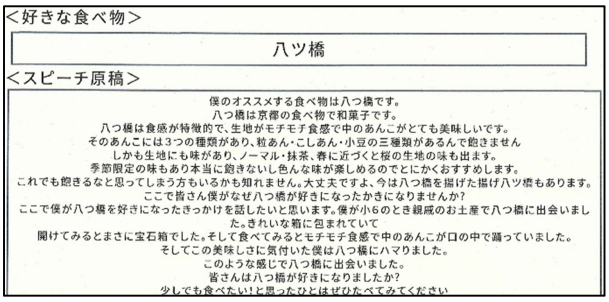

＜好きな食べ物＞

八ツ橋

＜スピーチ原稿＞

僕のオススメする食べ物は八つ橋です。
僕の好きな食べものは八つ橋です
八つ橋とは京都の伝統的な和菓子です。四りのもちもちの生地が中のあんこを包んでいます
そのあんこには３つの種類があり、粒あん・こしあん・小豆の三種類があるんで飽きません
しかも生地にも味があり、ノーマル・抹茶、春に近づくと桜の生地の味も出ます。
季節限定の味もあり本当に飽きないし色んな味が楽しめるのでとにかくおすすめします。
これでも飽きるなと思ってしまう方もいるかも知れません。大丈夫ですよ、今は八つ橋を揚げた揚げ八ツ橋も
ここで僕が八つ橋を好きになったきっかけを話したいと思います。僕が小６のとき親戚のお土産で八つ橋に出会いました。
きれいな箱に包まれていて
開けてみるとまさに宝石箱でした。そして食べてみるとモチモチ食感で中のあんこが口の中で踊っていました。
そしてこの美味しさに気付いた僕は八つ橋にハマりました。
このような感じで八つ橋に出会いました。
皆さんは八つ橋が好きになりましたか？
少しでも食べたい！と思ったひとはぜひたべてみてください

［図５］Ａ生徒の最初のスピーチ原稿


＜好きな食べ物＞

八ツ橋

＜スピーチ原稿＞

僕のオススメする食べ物は八つ橋です。
八つ橋は京都の食べ物で和菓子です。
八つ橋は食感が特徴的で、生地がモチモチ食感で中のあんこがとても美味しいです。
そのあんこには３つの種類があり、粒あん・こしあん・小豆の三種類があるんで飽きません
しかも生地にも味があり、ノーマル・抹茶、春に近づくと桜の生地の味も出ます。
季節限定の味もあり本当に飽きないし色んな味が楽しめるのでとにかくおすすめします。
これでも飽きるなと思ってしまう方もいるかも知れません。大丈夫ですよ、今は八つ橋を揚げた揚げ八ツ橋もあります。
ここで皆さん僕がなぜ八つ橋が好きになったかきになりませんか？
ここで僕が八つ橋を好きになったきっかけを話したいと思います。僕が小６のとき親戚のお土産で八つ橋に出会いました。きれいな箱に包まれていて
開けてみるとまさに宝石箱でした。そして食べてみるとモチモチ食感で中のあんこが口の中で踊っていました。
そしてこの美味しさに気付いた僕は八つ橋にハマりました。
このような感じで八つ橋に出会いました。
皆さんは八つ橋が好きになりましたか？
少しでも食べたい！と思ったひとはぜひたべてみてください

［図６］Ａ生徒のスピーチ原稿の変容

ギガタブを活用し練習前と練習後の自分の話し方を比較することが、自己評価や振り返りにつながった。また、最終的な成果がデータとして蓄積・分析可能なものとなるため、学習評価・振り返り評価の総括場面に非常に有効に活用することができた。

**②授業２（「書くこと」の言語活動）**

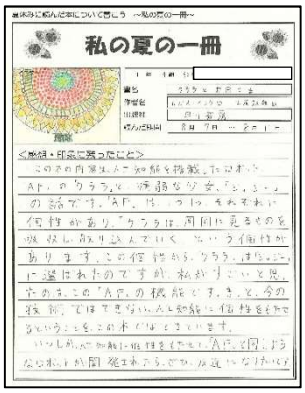
単元名「私の夏の一冊」

「私のおすすめの一冊を紹介しよう」

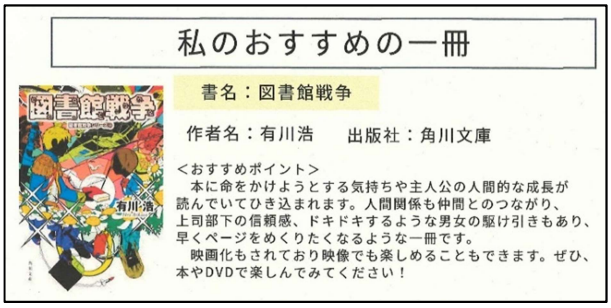
**ア ねらい**

自分の読んだ本を書いて紹介する言語活動を行う。

「私の夏の一冊」（ギガタブ不使用）では、夏休みの宿題として、夏休みに読んだ本を紹介する（[図７]）。「私のおすすめの一冊を紹介しよう」（ギガタブ使用）では、筆記用具としてギガタブを用いることで、原稿の作成、書く活動の過程において生徒の思考が整理されることをねらいとしている（[図８]）。




［図７］私の夏の一冊




［図８］私のおすすめの一冊

**イ 授業内容**

「私の夏の一冊」「私のおすすめの一冊を紹介しよう」二つの授業ともに、自分の読んだ本のおすすめポイントを書かせた。

「私の夏の一冊」の授業では、手書きで進めていくので、書き終えた段階で情報を大幅に差し替えたり構成を変えたりすることが困難であった。一方、「私のおすすめの一冊を紹介しよう」の授業では、ギガタブを活用することで、書き進めてから更に情報が必要であることが分かったときに、追加取材したり、文章を入れ替えたり容易にできた。これらの学習活動は、手書きでも可能だが、書き込んだり、共有したりするうえでの時間がギガタブを使うことで大幅に短縮でき、生徒の思考の連続を妨げる要因を減らすことにつながった。

「私のおすすめの一冊を紹介しよう」の授業では、発表の場を設けて、生徒が

［図９］ギガタブでの授業の様子

持つギガタブには発表した生徒の作品があり、それを各自が手元で見ることで、自分の作品と比べ友達のよさや改めて自分の作品のよさに気付くことができた（[図９]）。

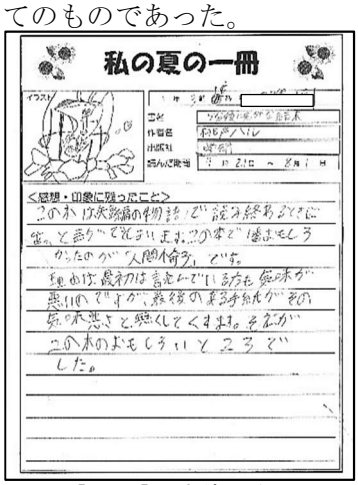
**ウ 生徒の姿**

「書くこと」の実践を通して、ギガタブを活用した言語活動の大きなメリットの一つに書くことが容易になったことで、小さな言葉の入れ替えだけでなく、文章を書き換えるといった推敲をしやすくなったことが挙げられる。書くことが苦手な生徒や意欲が低い生徒も手書きで書き進めた文章を、大幅に順序を入れ替えて書くことはかなり困難であったが、ギガタブを使用することで推敲も容易になることが分かった。

**[表４]本校の生徒の意欲面の実態**

| ギガタブを活用することで、国語の書くことに対して、前向きに取り組むことができますか？ | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 学習後 | 76% | 18% | ６% | ０% |
| ４　そう思う　３　どちらかと言えばそう思う<br>２　どちらかと言えばそう思わない　１　そう思わない | | | | |

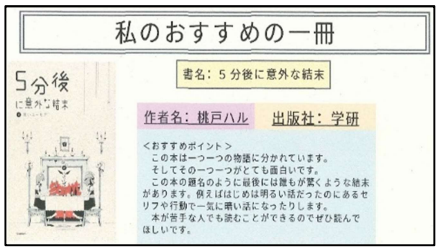
上記より、[表３]と比べると、ギガタブを活用することで主体的に学習に取り組むことができるといえる（[表４]）。特筆すべきは、「国語の書くことに対して、前向きに取り組むことができるか」の質問に、肯定的な意見の生徒が 94%いることであり、書くことに関する意欲の向上がうかがえる。また、残りの６%の理由は、「ローマ字入力が苦手でわからない」「ギガタブを使う時間が限られている」などというギガタブの使い方に関してのものであった。




**[図 10]Ｂ生徒の作品**

[図 10]は、書くことにあまり前向きに取り組むことができないと答えたＢ生徒の「私の夏の一冊」である。文章を構成し直した跡やよく推敲した跡も見られなかった。

[図 11]は、同じＢ生徒のギガタブを活用し「私のおすすめの一冊」を書かせた場合である（[図 11]）。Ｂ生徒は、何度も粘り強く文章を考え、おすすめポイントを書いていた。また、「そして」「例えば」という言葉を使ったほうがわかりやすいと考え、文章を直していた。




**[図 11]Ｂ生徒の作品**

少なからず生徒には「失敗するのがいやだ」などのマイナスな気持ちがある。失敗してもいいから取り組んでみようと思えれば、より主体的に取り組むことができると考える。ギガタブを活用したときには話すのがつまったり、書くことを間違えたりしたときに、内容を容易に書き換えることができる。また、画面上で書き出した文章や資料を入れ替えるなど、手書きを用いる場合に比べて、言語操作が格段にしやすい様子が見られた。

右の図は全体に向けて発表している状況である。全体で共有する際にも、ギガタブを活用することができる。手元で同じものを見ることで、全員で共通認識をもちやすい。一人ではできなかったことや、広げられなかったことを、より深く多様な考えにつなげられると考える（[図 12]）。

**[図 12]生徒が共有している場面の様子**

ギガタブの活用によって、生徒一人一人の学びが一層可視化され、個に応じた指導がより容易にできるようになった。学習の進捗状況が一目でわかり、明確に把握できることから形式的な評価にも役立ち、データが蓄積することで生徒の成長を見取ることができ、評価の信頼性、妥当性を高めることができた。

**③ギガタブの効果**

ギガタブは生徒の活動を記録するための媒体ではなく、ギガタブを活用する生徒の思考そのものとなる可能性をもった媒体である。実践を積み

重ねたことから、ギガタブの特性は学習過程を一度にでき、思考の整理をしやすいということがわかる。ここで思考の整理とは、生徒が頭で考えていることを可視化し、よりよい表現に結びつけることである。

［表５］生徒の答え

| |
|---|
| 質問「ギガタブを使用した場合、どんなことを考えながら作業したか」<br>・どうすれば分かりやすく、本の魅力を伝えられるか考えた<br>・短い文でどれだけ説得できるかなど言葉を選んだり考えたりして作業した<br>・より見た人が読みたいと思えるようにギガタブを使って、もとの文章に付け加えることができた |

また、上記アンケートの生徒の答えから、「どうすれば分かりやすく」「言葉を選んだり考えたり」「付け加える」という答えに注目した（［表５］）。生徒はギガタブを活用しない場合と比べて、ギガタブを活用することで、より具体的に思考を働かせているとわかる。

ギガタブを活用することで、自分の考えたものを取捨選択し、どのように表現するかを決めるタイムラグを減らすことができる。その場で思いついたことや、こうしたいという表現を叶えやすいと考える。ギガタブを活用することで、スピーチ原稿→自分の話す姿の動画→原稿の推敲→自分の話し方の見直しなどの一連の学習過程を即時に取り組むことができる。

ギガタブは生徒のもっている力を大きく引き出す力があると考える。本来もっている力を、「間違えることが嫌だ」「字を書くことが苦手」などといった思考以外の理由で、表現できない生徒がいる。しかし、ギガタブを活用することで、前向きに取り組む意欲が出てくると考える。一見すると課題の多い生徒であっても、多様な手立ての中でその生徒に合う学習指導に出合うことによって、生徒の姿が大きく変わる瞬間が見えてくる。その多様な手立ての中の一つがギガタブである。生徒一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供するということも、これまでは手間暇をかけて準備する必要があった。しかし、ギガタブの活用によって、より簡単にかつ日常的に行えるようになった。ギガタブは生徒一人一人の学びの習得を顕在化するとともに、個別最適な学びに大きく寄与するものになると考えられる。

## ４　研究のまとめ

### (1) 成果

**①主体性**

ギガタブを活用することで、主体的に学習に取り組むことができた。

**②表現力の向上**

ギガタブを活用することで、生徒の思考が整理され、生徒が頭で考えていることを可視化し、よりよい表現に結びつけさせることができた。また、自分の思いを適切に表現する資質・能力を身に付けさせることができた。

### (2) 課題

**①指導のねらいに応じた活用**

ギガタブを使わせること自体が国語科のねらいではない。国語科のねらいを実現するためにギガタブを、その手立てとして活用することが必要である。

**②協働する活動**

ギガタブを用いて、より生徒同士で表現力を身に付けさせる言語活動の設定をしていきたい。

【主な引用／参考文献等】

・千葉市教育委員会学校教育部「令和３年度千葉市学校教育の課題 21 世紀を拓く」

・文部科学省『中学校指導要領解説国語編』2018

・藤森裕治『学力観を問い直す国語科の資質・能力と見方・考え方』明治図書出版 2018

・水戸部修治『小学校国語 ICT＆１人１台端末を活用した言語活動パーフェクトガイド』明治図書出版 2021

・石丸憲一、正木友則、上山信幸『Chromebook でつくる小学校国語科の授業』明治図書出版 2021

・冨山哲也、廿樂裕貴、積山昌典、山内裕介編『中学校国語新３観点の学習評価完全ガイドブック』明治図書出版 2021